

熱き風

ひょうご経済小説の舞台

今に生きる幻の巨大商社

六甲山を背に鎮る神戸・灘の神龍寺。瀛(よう)とたたずまいの寺は時折、懐かしい顔を迎える。幻の巨大商社、鈴木商店ゆかりの人々でつむる「辰巳会」。すい星のよつに現れ世界を席捲し、日本を恐慌の渦へと巻き込んだ。表裏を弄(もよほ)してもなお、伝説は語り継がれる。

「信用と財産を充分に利用して出来ただけの金をこじこえ、極度の融通を計っていった。まっしぐらに前進じゃ。」



金子直吉

64(1966)年、文藝界に連載された「鈴木商店」は、綿密な取材で反響を呼んだ。経済小説の地位を高めた城山三郎の金子直吉とされる。「世間の連合がいかにも通っているか、実感した」と振り返る。文藝文庫など。

城山三郎 著 「鼠—鈴木商店焼打ち事件—」

3

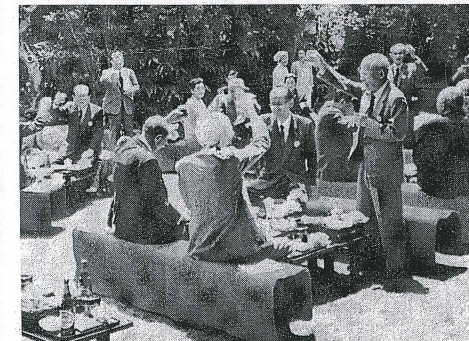


無残に焼け落ちた鈴木商店。奥のなかより、一層の廃墟を築いたのが、(1918年8月)神戸市の一

『まっしぐらに前進じゃ』

「夜を焦がさんばかりの炎、十重二十重に燃えて、城山をあげる群衆相手に、手は出しちもない。半鐘は鳴り続け、焼打ちの炎はあつたやうに上がる。」

一八八八年八月十二日、本店は焼けた。米不足というのに白米を買い占めていた。世間を支配したのは鈴木商店だ。



ゆかりの人々が集う「辰巳会」。組織と人々を愛した金子直吉の精神が受け継がれている(2000年5月) 同市灘区、神龍寺

「鈴木は悪いことをしてない。いつか、きつとわかるんじや。それが、直吉の返事であつた。彼は単純にそう信じている。それが、彼の前に、事業のものがあつたのだ。」

二十七年、倒産。金子は手塩にかけた企業群の整理に奔走した。債務整理が一段落した。再出発の拠点となつたのは、金子直吉の故郷(現、兵庫県神戸市)。七十九歳で世界をめぐり、お家再興の心があつたという。

「同家に住んでいても、気遣いも掛けられず、秘書から許されたときだけ、祖父の部屋にいたのです。」「孫の真意を察し、同市東灘区。最晩年でも、事業欲は衰えなかった。」

金子は俳句を好んだ。小説の題を城山は「鼠」の「鼠」から取った。主家に忠実な番頭の意味だ。

エニギに満ちあふれた当時の神戸。翻って現代、だれが迷い、その先を見いだせない。生涯、攻めの姿勢を崩さなかった金子。今は、その一途がまぶしい。

初葉と太閤秀吉奈翁(ナポレオン) 白鼠 敬称略(藤本 陽子)

鈴木商店のこと

宮田 義晴

(日商岩井社友会 平成十九年十月一日号寄稿より)

作家の城山三郎が今年三月亡くなった。

思い出して書棚の奥から同氏の著作『鼠』を取り出して読み返したが、同氏が取材の労を惜しまず、その事実の集積を公平に分析して書かれた『鈴木商店』の実像について私なりのプリズムを通して記述してみたいと考えた。

他方、昭和四十三年に発行された社史『日商四十年の歩み』は本文七百頁余にわたり鈴木商店に始まり日商創立、その戦前から戦後にかけて日商が岩井産業と合併する迄の史実が正確、且つ詳細に書き綴られている。中でも鈴木店の全盛期から破綻、そして日商創立迄の記述内容は心に迫るものがある。

鈴木商店は誰もが知る通り、明治二十七八年の日清戦争で日本がその領土とした台湾との取引拡大が以後の急成長の端緒となった。その後、明治三十七三十八年、世界最強の陸軍国ロシアとの戦争の勝利によって、日本は一躍明治維新から僅か四十年足らずで世界の一等国に並び、鈴木も更なる発展の堡壘を固めた。既に三井、三菱は明治維新以降着々と地盤を拡大して来たが、その三井、三菱は並べるとその商権を拡大したのは鈴木商店の大番頭、金子直吉氏である。(以下、人名の敬称は省略させて戴く)

明治から大正にかけて鈴木商店は金子の俊敏な手腕により、国内では六十社以上の企業を傘下に治め、又海外には有能な人材を配備し近代国家形成の時流に乗って一躍その名を馳せた。その背骨は鈴木ヨネから全て委されて経営の配を振るった金子直吉、そして金子を支えたのが本店支配人西川文蔵、在ロンドン高畑誠一、加えて永井幸太郎、落合豊一などの優れたメンバーである。

鈴木店の経営の範囲は、製鋼、金属精錬、造船、人絹、毛織、セルロイド、窒素肥料、砂糖、小麦、染料、製油、煙草、樟脳、ゴム、ビール、海運、倉庫、保険等にわたる。現在も著名会社である帝人、神戸製鋼、石川島播磨は鈴木店の分身である。大正六八年当時の鈴木店の年間取扱高は十六億円、これは、三菱はもとより三井物産の十二億円を圧倒し日本一の商社となった。スエズ運河を通過する全船腹の一割はニッポンの鈴木店のものと云われた。

併し大正七年、第一次世界大戦の終焉とも重なって、折しも一挙にのし上がった鈴木への大衆の反感が米騒動と鈴木本店焼打ちとなり、これが後日、鈴木破綻の発端となった。

処で、当時本店支配人であった西川文蔵は、当時鈴木の世界貿易取引の要であったロンドン支店の高畑に米騒動、焼打ちの実態を知らせたところ、これは後日判明したことであるが、高畑から西川への返電は「ケイガイニタエズ」、これを受け取った西川は啞然とすると共に高畑が何故かかる電報を寄こしたか高畑の意とする処を知り、以降鈴木店の経営について塾考せざるを得ないことを認識した。当時の日本の国情、経済の時流の中で飛躍的に伸びた鈴木店の経営規模が金子一人の裁断の枠内では御することが不可能との認識が西川、高畑が共有することになった。世界を股に掛けてロンドンに居を置いて縦横無尽に手